

きみと世界との戦いでは、
世界を支持せよ

——フランツ・カフカ、一九一七年

彼こそが私の同国人。
彼こそが、人間

——アントニ・スウォニムスキ、一九四三年

早朝の黒いミルクを
我々は晩に飲む
昼に飲み、朝に飲み、夜に飲む
我々は飲み、そしてまた飲む

——パウル・ツェラン、一九四四年

全ての人には名前がある
運命が彼に与えた名前
隣人たちが彼に与えた名前が

——ゼルダ・ミシユコフスキ、一九七四年

ブラックアース(上)
◇目次

序章 ヒトラーの世界 7

第1章 生存圏 23

第2章 ベルリン、ワルシャワ、モスクワ 49

第3章 パレスチナの約束 89

第4章 国家の破壊者たち 117

第5章 二重の占領 173

第6章 グレイター・イーブル 211

第7章 ドイツ人、ポーランド人、ソヴィエト人、ユダヤ人

下巻目次

第8章 アウシュヴィッツの逆説

第9章 主権と生存

第10章 グレイな救済者

第11章 天と地とのパルチザン^{あめ}

第12章 正義の少数者

終章 私たちの世界

謝辞

用法についての覚え書き

訳者あとがき

参考文献

原註

公文書館

索引

ブラックアース(上) ホロコーストの歴史と警告

プロローグ

ウィーンでもファッショナブルな第六区では、ホロコーストの歴史が舗道の中にある。ユダヤ人が暮らし働いていた建物の前、ユダヤ人がかつて素手でこすらされていた舗道にそっと埋め込まれているのは、名前、移送日、死んだ場所を記した小さな四角い真鍮の記念銘板だ。

大人の心には、現在と過去とをつなぐ言葉や数が浮かんでくる。

子どもの見方は違ってくる。子どもは物から始める。

ウィーンの第六区に住む小さな坊やは、毎日通りの反対側を労働者たちが建物一つずつ進んでゆくのを観察している。パイプを修繕したりケーブルを埋め込んだりするためにやるように、舗道が掘り返されるのを観察している。ある朝幼稚園に行くバスを待ちながら、坊やは今はちようと通りの向かいにやって来た労働者たちが湯気の立っている黒いアスファルトをシャベルですくって詰めてゆくのを眺めている。記念の銘板は、薄ら陽を反射して、手袋をはめた手の中にある謎めいた代物だ。

「あの人たちがやっているの、パパ？」父親は黙ったままだ。彼はバスが来ないかと通りを眺めやる。ためらった後に答え始める。「あの人たちは造っているのさ……」。そこで口ごもる。たやすいことでは

ない。バスがやってきて、視界を遮り、オイルと空気のせいぜいという音を立てて自動ドアが開いて、普段の一日になる。

四分の三世紀も昔のこと、一九三八年三月にウィーン中の街路で、ユダヤ人は「オーストリア」(Ostria)という語を舗道からこすって消していた。ヒトラーとその軍隊が到着した時点で存在をやめた国家を表す文字を消すためだ。今日同じその舗道に、そのユダヤ人たちの名前が現れている。ヨーロッパそのものと同じで、過去については心許ないままの復活したオーストリアを咎めるものとして。

どうしてウィーンユダヤ人は、オーストリアが地図から抹殺されたのと時を同じくして迫害されたのだろうか？ オーストリアそのものでユダヤ人への憎悪が明らかだったときに、殺害されるためにそこから一〇〇キロも離れたベラルーシに移送されたのはなぜか？ ある町に、(ある国に、ある大陸に)定着していた民族をして、どのようにしてその歴史を突如暴力的に終焉させることができたのか？ どうして見も知らぬ者が見も知らぬ者を殺すのだろうか？ どうして隣人が隣人を殺すのだろうか？

ウィーンでも、中欧、西欧の大都市と同じで、ユダヤ人は都市社会の目立った存在だった。ウィーンの北方でも南方でも、そして東方の東ヨーロッパでも、ユダヤ人たちは五世紀以上にわたってずっと、たくさんの方が居住してきた。それが、五年も経たぬうちに五〇〇万を超えるユダヤ人が殺害されたのだ。

我々の直感に役に立たない。我々は然るべくホロコーストをナチスのイデオロギーと結びつけるが、ユダヤ人を殺したのはナチス以外、それどころかドイツ人以外も多かったことを忘れている。我々はま

ずドイツのユダヤ人を頭に描くが、ホロコーストで殺害されたユダヤ人のほとんどすべてがドイツ国外に住んでいた。我々は強制収容所を思い描くが、殺戮されたユダヤ人のうち強制収容所を見たのはごく少数だった。我々は「国家」を非難するが、殺害は国家制度が破壊された地域でのみ可能であった。我々は「科学」を責めるが、そのことでヒトラーの世界観のある重要な要素を支持してしまっている。我々は「民族」を非難するが、ナチスそのものが使った単純化に身を委ねつつの非難である。

我々は犠牲者を思い出すが、記念を理解と混同しがちだ。ウィーンの第六区にある記念碑は「将来のために忘れまい」と呼ばれている。今やホロコーストの一つが過去のものになったからといって、はつきりとした未来が待ち受けていると確信を持つもののだろうか？ 我々は、記念された犠牲者だけでなく、忘れられた加害者とも世界を共有している。ヒトラーの時代にはなじみ深いものだったし、彼がそれに応えてみせた恐怖を甦らせながら、世界は今も変わりつつある。ホロコーストの歴史は終わっていない。先例としてのホロコーストは永劫のものだし、それが与えた教訓はまだ学習されたとはいえない。

ヨーロッパのユダヤ人の大量殺戮の啓発的な説明は、地球規模で解釈されるべきである。というのも、ヒトラーの考え方は、ユダヤ人を自然の受けた痛みとして扱うので、生態学的だからだ。そうした歴史は否応なく植民主義的になる。というのも、ヒトラーはユダヤ人の住む近隣の土地での絶滅戦争を欲していたからだ。そうした歴史は否応なく国際的になる。というのもドイツ人らがユダヤ人を殺害したのはドイツ国内においてではなく、他の国々においてだったからだ。そうした歴史は年代記的でなければならぬ。というのも、ヒトラーがドイツで権力の座に就いたのは物語の一部であって、オーストリア、チェコスロバキア、ポーランドの征服という、「最終的解決」という説を再度明確にした前進が続いた

からだ。そうした歴史は特別な意味合いをもって政治的にとらえざるをえない。というのも、ドイツが近隣諸国を破壊したことが、とりわけ占領下ソ連においてだが、絶滅の技法が考案された地域を生み出したからだ。そうした歴史は、殺戮地帯の至る所でユダヤ人、非ユダヤ人を問わず、すべての集団から史料を得ているのだから、ナチス自体の観方を超えた観方を提供するような多焦点レンズで眺めなければならぬ。これは正義の問題であるだけでなく、理解の問題でもあるからだ。そうした考慮もまた人間的なものとなるはずである。殺害しようとする試みだけでなく生き延びようとする試みも記録し、生き延びようとするユダヤ人だけでなくわずかとはいえユダヤ人を救助しようとした非ユダヤ人も描き、個人個人や出逢いが本来的に持つ簡略化できない複雑さをも受け容れるのだから。

ホロコーストの歴史を辿ることは、我々の精神と生活にヒトラーの時代から残っているものを我々が経験するのを可能にするのだから、否応なく現代性を持つ。ヒトラーの世界観はそれだけでホロコーストをもたらしたしはしなかつたが、その世界観に隠された首尾一貫性が、新種の破壊的な政策と、人間が大量殺戮をできるものだという新たな認識を生み出したのだ。一九四一年に現れたイデオロギーと環境の結合がそのままふたたび出現することはないだろうが、似通ったものの出現の可能性はある。過去を理解しようとする努力の一部は、よって、我々自身を理解するのに必要な努力なのだ。ホロコーストは歴史であるだけでなく、警告なのである。

序章 ヒトラーの世界

「きつちりと測られる空間である地表」という限界が我々の惑星にはあることを除けば、将来など何一つわかるはずがない、そうヒトラーは考えていた。生態学とは希少の謂いだし、生存は土地を求める闘いだ。生命の不易の構造は動物を種に分かつことであつたし、「内なる隔離」と、死に至る果てしない争いを運命づけられているのだ。人種とは動物の種のようなものだ。ヒトラーは確信していた。最優等人種は劣等人種から離れて依然として進化をしているし、よつて異人種間の交配はありうることだが罪深いことだ。人種は動物の種と同じような行動形態をとらねばならない。同種のみと性的に交わり、異種は殺そうとするのだ。ヒトラーにとつてはこれこそ法であつた。重力の法則と同じくらい確かな人種闘争の法であつた。その闘争は果てることがないかもしれないが、結果も定かでなかつた。人種によつて、凱歌をあげ繁栄もすれば、逆に飢えて消滅することもありうるのだ。¹

ヒトラーの世界では、ジャングルの法が唯一の法だつた。人々は慈悲の念を持つなどとかけらも思つてはならないし、あたうるかぎり他を捕食して生きねばならない。ヒトラーはかくして、人類は想像したり新たな形態の結合を生み出す能力において自然とは異なるものと見なす、伝統的な政治思想と

訣別したのであった。政治思想家たちは、その前提から出発して、可能なだけでなく最も公正である社会構造を描こうとしていたのだったが。けれど、ヒトラーにとって自然は、非凡で獣的で圧倒的なる真実であつたし、他の考え方をしようとする歴史はまるごと幻想だつた。ナチスのいちばんの法理論家であつたカール・シュミットは、政治は歴史とか観念からでなく、我々が抱く敵意から生じるのだと説明した。我々の人種的な敵は生まれつき選ばれているのであり、我々の仕事は闘い、殺し合うことだ²。

ヒトラーは記している。「自然界には政治的な境界などない。自然はこの地球に生命体を配し、しかる後権力を賭けて自由に戦わせるのだ」。政治が自然であり、自然が闘争であるならば、いかなる政治思想も成り立たなくなる。この結論は、人間の活動を生物学で理解できるとした、一九世紀にはありふれた観方のまさに極論であつた。一八八〇年代と一八九〇年代に、チャールズ・ダーウィンの自然淘汰説に影響を受けた真摯な思想家も普及者も、古来からの政治思想の問題点は動物学におけるこのプレイクスルーによつて解決を見た¹と主張したのであった。ヒトラーの青少年期に、競争こそ社会的な善であるというダーウィンの解釈の一つが、あらゆる主要な形相^{けいさう}の政治学に影響を与えていた。イギリス人で資本主義の擁護者たるハーバート・スペンサーにとつて、市場は生態圏^{エコクワイプ}に似ていて、そこでは最強最良の者が生き残つた。妨げられることなき競争によつてもたらされる効用が、当面の悪^{イブレル}を正当化した。資本主義に反対する第二インターナショナルの社会主義者たちも、生物学的なアナロジ^{アナロジー}を採用入れた。彼らは階級闘争を「科学的」だと見なし、人間を、人間性として特定できるものを備えたとりわけて創造的な存在としてではなく、たくさんいる動物の中の一つと見なすに至つた。当時の指導的なマルキストの理論家カール・カウツキーは、衛学的にだが、人間が動物であることを主張した³。

もつとも、こうしたリベラルや社会主義者たちは、認識していたかどうかはさておき、習慣や制度へ

の愛着によって制約を受けていた。社会的な経験から生じた精神的習慣からして、彼らはこれ以上なく急激的な結論などには達することはなかった。彼らは、経済成長とか社会正義のような善に倫理的に傾倒していて、自然界の競争がそうした善をもたらすと思ひ巡らすことを、魅力的だし都合も良いと思つていた。ヒトラーは自著を『わが闘争』(Mein Kampf)と題した。「わが」と「闘争」という二語を起点として、二巻からなる自著、そして二〇年にわたる政治生活を通じて、ヒトラーは第三者がそうではないところ、はてしなくナルシスティックであり、無慈悲なほど首尾一貫しており、狂的なほどニヒリスティックであった。止むことのない人種闘争は生活の一要素でなく真髓であった。そう言いきるのは、理論をうち立てることなど眼中になく、宇宙をありのままに観察するからであった。闘争は、何らかの目的に到達するための手段でなく、生活そのものだったのだ。闘争はそれによつてもたらされると思われる繁栄(これは資本主義の場合)や正義(これは社会主義の場合)によつて正当化されはしなかった。ヒトラーにとつての要点は、「望ましい目的が血塗られた手段を正当化する」といったことではまるでなかった。目的などなく、醜悪さがあるだけだった。人種が現実であり、それに反して、個人も階級も束の間の誤った存在だった。闘争はメタファーとかアナロジとかでなく、有形にして完まったき真実であった。「世界は怯懦な諸民族のためにはあるのではない」から、弱者は強者に支配されるべきであった。知つておくべきこと、信すべきことは、それだけで十分だったのだ。

ヒトラーの世界観は宗教的にも世俗的にも伝統を斥けたが、にもかかわらずどちらにも依存していた。自身がオリジナルなものを持つ思想家ではなかったが、ヒトラーは思想と信仰とにとつての危機に、あの種の解決法を与えた。彼以前のたくさんの者と同じように、ヒトラーも両者を合一させようと努めた。

けれど、彼が目論んだのは、魂と精神とともに救済するような上を向いての統合でなく、どちらをも破壊するような蠱惑的な衝突だった。ヒトラーの人種闘争は科学によって承認されたものとされていたが、彼はその目的は「日々の糧」であるとしていた。その表現で彼はキリスト教のいちばん良く知られたテクストから引用したのだが、その意味するところは大きく変えてしまっていた。主の祈りを唱える者は願う。「わたしたちの日々の糧を、きょうもお与えください」。その祈りの表す宇宙では、形而上学が、この惑星を超えた秩序が、次々と天体を超えてゆく善の觀念が、存在しているのだ。主の祈りを唱える者たちは神に「わたしたちの負い目をお赦してください、わたしたちも自分に負い目のある人を赦しましたように。わたしたちを誘惑に遭わせず、悪からお救いください」と願う。ヒトラーの「自然界の富を求めぬ闘争」では、つかめるものは何でもつかまないので罪であり、他者の生存を許すのもまた罪であった。慈悲の念は、弱者が繁殖するのを許すので事物の秩序を冒した。ヒトラーの言では、聖書の十戒を拒むことこそ人類がやらねばならぬことだった。彼は宣言している。「仮に私が戒律を受け容れられるとしたら、これだけだ。『種を絶やしてはならない』」。

ヒトラーはクリスチャンになじみ深いイメージや言葉の綾を用いた。曰く、神、祈り、原罪、戒律、預言者、選民、メシア——加えて、まず天国、ついでエジプト脱出、最後は贖罪というなじみ深いキリスト教の三部からなる時の流れまで入っていた。我々は不潔の中に生きているのだから、天国に戻れるように懸命に自身と世界とを浄めようとせねばならない。天国を、神の創造物の協和でなく種の闘争とみるのは、キリスト教徒の切望を生物学のはっきりとした現実と融合させることであった。万人の万人に対する闘争は恐ろしい無目的性ではなく、宇宙で抱かれるべき唯一の目的であった。「創世記」にある如く自然の豊かさは人類のためであったが、自然の法則に従いそのために闘う者たちだけのためであ

った。「創世記」におけると同様に「わが闘争」においても、自然は人類にとつての資源であつたが、すべての人間のためではなく、勝利した人種のためであつた。エデンは園とちでなく塹壕さくごであつたのだ。

「創世記」におけると同様に、性交は問題ではなく、解決なのだ。凱歌をあげた人種は交わらなければならぬ。ヒトラーの考えでは、殺人の後で次に人間がやらねばならないことは、セックスをし繁殖することなのだ。彼の計画にあつては、人類の没落につながる原罪は魂のものであり、肉体のものではなかつた。ヒトラーにとつては、我々の不幸な弱点は、我々が考えることができ、他の人種に属する者もまた同じことができるかと納得してしまい、それによつてその連中を同胞と認めてしまえるところにあつた。ヒトラーの血塗られた天国を人類が追い出されたのは、性交によつてではなかつた。人類が天国を追い出されたのは、善悪を弁わきまえたからであつた。

天国が滅んで人類が自然と切り離されると、「創世記」に出てくる蛇のような、人間でも自然でもない役回りが罪を負う。仮に人類が実際に自然の一要素に過ぎないのなら、そして自然が科学によつて血塗られた闘争と見なされているなら、自然を超えたものが種を腐敗させたに違ひない。ヒトラーにとつて、現世の善悪の知識をもたらし、エデンを破壊したのはユダヤ人だつた。人類に向かつて、人類は他の動物より上の存在であり、自分たちで未来を決定する能力があるのだ、そう告げたのはユダヤ人だつた。政治と自然、人間性と闘争との間の誤つた区分を導入したのもユダヤ人だつた。ヒトラーの観みるところ、彼の運命は、ユダヤ人の靈性という原罪を贖い、血塗られた天国を取り戻すことだつた。ホモサピエンスは抑制されることなき人種間の殺戮を通して生存しうるのだから、ユダヤ的に理性が衝動に勝利するのは種の終わりを意味してしまうことになる。ヒトラーの考えでは、人種が必要とするものは、その人種が凱歌をあげてを許す「世界観」であり、その世界観は、突き詰めていけば、人種そのもの

の持つ思慮を要さぬ使命への「信奉」の念だ^たった。

ヒトラーがユダヤの脅威を前面に出すのは、彼が宗教的な考えと動物学の考えを独特な形で結合させたことを表していた。ヒトラーは、仮にユダヤ人が凱歌をあげたら、「さすれば勝利の王冠は人類にとつての葬儀の花輪になるだろう」と記している。他方、人類のいない宇宙というヒトラーの描くイメージは、人類がそのなかで進化してきた昔からある惑星に科学が下した裁断を受け容れたものであった。ユダヤ人が勝利した後では、「地球は、何百万年も前にそうであつたように、ふたたび人類がまるでないまま宇宙を飛んでゆくことになろう」とヒトラーは記している。同時にヒトラーが『わが闘争』のままに同じ節で明らかにしているように、人種と絶滅が古来からある地球は「神の創造物」なのだ^た。「それゆえ私は創造主の願いとおりに必ずやふるまう。私がユダヤ人を抑えていられるかぎり、私は主のなされることを擁護しているのだ^た」。

ヒトラーは種を人種に分かたれるとみていたが、ユダヤ人が人種であることは否定した。ユダヤ人は優等人種とか劣等人種とかいうのでなく、人種に非ざるもの、あるいは「反人種」であつた。人種なるものは自然の摂理に従い土地と食物とを求めて闘うのだが、ユダヤ人の方は「反自然」という相容れぬ論理に従っていた。ユダヤ人は、どこかの居住地を征服して満足するのを拒むことで自然の基本的な摂理に抗し、他の人種にも同じように振る舞うように説いた。彼らは惑星全体とそこに住むさまざまな人種を支配することを主張したし、その目的のために自然における闘争から人種を引き離す一般性を持つ思想を案出した。地球が提供するのは血と大地以外なかつたが、それなのにユダヤ人は薄気味の悪いやり方で、この世界を、生態学的な陥穽の側面は少なく、逆に人間の生み出す秩序の点では多少なりとも

発達したものとして見せる観念を生み出した。政治的な互惠性の発想、人間が他の人間をやはり人間であると認める習慣は、ユダヤ人から発したのだ。¹⁰

ヒトラーの基本的な論評は、「人間は善であるが過度にユダヤ的な文明によって腐敗させられている」というような月並みなものではなかった。むしろ、人間は動物であり、倫理的な熟考を重ねることなどは、それ自体ユダヤ的腐敗の徴しるしなのだ。普遍的な理想を掲げそれへ向けて精一杯努力することそのものが、まさに忌むべきことなのだ。ヒトラーの最も重要な代理人ハインリヒ・ヒムラーは、ヒトラーの考えるこじつけの悉くに従ったわけではないが、結論は把握していた。すなわち、倫理それ自体が誤りであり、唯一の道徳とは人種への忠誠である、という結論をである。大量殺戮への参加は、ヒムラーの主張では良き振る舞いであるが、それというのも大量殺戮は、自然との一体化だけでなく、内部での調和をも人種にもたらすからである。たとえば、数千というユダヤ人の死体を眺めることが難しいのは、陳腐な道徳が優越していることの証しであった。殺害の一時的な心労は、人種の将来への価値ある犠牲に過ぎなかつた。¹¹

ヒトラーの考えでは、いかなる反人種的な態度もユダヤ的であつたし、いかなる普遍的な考えもユダヤ人の支配のからくりだった。資本主義も共産主義もユダヤ的だった。それらが見かけは闘争を容認するのは、たんにユダヤ人の世界制覇の夢の隠れ蓑に過ぎない。国家といういかなる抽象概念も、ユダヤ的である。「国家自体が目標である国家など存在しないのだ」とヒトラーは記している。「人間の最高の目標は」と彼は明らかにする。「どこか特定の国家なり政府なりを維持することではなく、その種を維持することである」。既存の国家の国境は、人種闘争の間に自然の力によって洗い流されてしまふだろう。よって、「政治的境界の存在などによって『永遠とこよほの正義』の境界から逸れていってはならないのだ」¹²。

仮に国家が由々しき人類のなせる業わざでなく、自然によつて超克されるべき脆弱な境界であるというなら、法は一般的なものでなく特殊なものとなり、平等につながる道でなく人種的優越の作為に過ぎないということになる。ヒトラーの個人的な弁護士で第二次世界大戦中は占領下ポーランドの総督であったハンス・フランクは、法は「ドイツ民族の生存のための要素の上に」築かれている、と主張した。人種を外れたいかなるものに則つた法の伝統も「血の通わぬ抽象」なのだ。法は、指導者フューラーが己が人種の幸福について時々得る直覚を成文化する以上の目的を持たない。ドイツ語の概念のレヒツシュタート（Reichstaat、法治国家）には、実質がなかつた。カール・シュミットが説明するように、法は人種に奉仕し、国家は人種に奉仕したので、人種が唯一的を射た概念であつた。外的な法基準による国家の概念など、強者を抑圧するために目論まれたまがい物に過ぎなかつた。

普遍的觀念が「非ユダヤ人」の精神に浸透するかぎり、それらはユダヤ人の利益に適うように他の人種共同体を弱体化させるものだ、とヒトラーは主張した。さまざまな政治思想の内容は要点を外れていたが、それというのもすべてが愚者のための計略に過ぎなかつたからだ。ユダヤ人のリベラルも、ユダヤ人のナシヨナリストも、ユダヤ人のメシアも、ユダヤ人のボルシェヴィキもいなかつた。つまりは、「ボルシェヴィズムはキリスト教の非嫡出子である。共にユダヤ人の考え出したものだ」。ヒトラーはイエスを、その教えがパウロによつて今一つの偽りのユダヤ的普遍主義、つまり「弱者への慈悲」という普遍主義になるまで曲解されてしまった「ユダヤ人にとつての敵」と見なしていた。聖パウロからレフ・トロツキーに至るまで、うぶな者たちを誘惑するさまざまな見せかけを採り入れたユダヤ人ばかりだ、そうヒトラーは主張した。諸々の思想は歴史的な出自も持たなかつたし、連続して起きる出来事や個々人の創造性にも何の関わりもなかつた。思想はたんにユダヤ人が戦術上創り出したものであり、そ

の意味では、まるで同じでどうでもよいものだった。^{*14}

実際にヒトラーにとつては、人類の歴史などそのものとしては存在しなかった。「世界の歴史で起きたことなど、よかれ悪しかれ、どれもこれも人種の自己保存本能の表れに過ぎない」とヒトラーは喝破した。過去のことで記録に留めておかねばならぬことは、自然界の構造を歪ませるユダヤ人どもの絶え間ない試みだけだ。これはユダヤ人が地球上に住んでいるかぎり続くことになろう。「この秩序をつねに破壊するのはユダヤ人どもだ」とヒトラーは口にした。強者は弱者を飢えさせるべきだが、ユダヤ人は弱者が強者を飢えさせるように事を運ぶことができた。これは通常感覚では不正ではないが、「存在の論理」を侵害していたのだ。ユダヤ的思想によつて歪まされた宇宙においては、闘争は思いもよらぬ結果を招来することがありえた。適者生存どころか適者の飢えである。^{*15}

この論法では、ドイツ人はユダヤ人が生存しているかぎり、つねに犠牲者となろう。最優等人種として、ドイツ人は最大のもを受けけるに値するが、失うものもまた最大なのだ。ユダヤ人の自然に反する力は「将来を殺す」のだ。

ヒトラーは歴史のない世界を何とか規定しようとしていたが、彼の考えは自身の体験で修正されていた。史上最も血なまぐさい、そして自身で文明化されたと考えていた大陸で戦われた第一次世界大戦は、たくさんのヨーロッパ人の間にあつた「闘争は結構なことだ」という広汎な確信を根底から覆した。けれども、極右、極左のヨーロッパ人の中には、正反対の教訓を引き出した者もいた。彼らにとつては、戦争で流された血もまだまだ広がりにつけ、払われた犠牲もまだまだ不十分だった。訓練された主意主義者マルキストである、ロシア帝国のボルシェヴィキにとつて、戦争とそれがもたらす革命的エネルギー

ーとは、世界の社会主義的再構築を始める好機であった。ヒトラーの観方は、他のたくさんのドイツ人にとつてと同様に次のようだった。戦争は本格的に雌雄が決せられる前に、人種的な優越者が当然の取り分を手に入れていないうちに戦場から引き離されて、終結してしまつたのだ。むろん、ドイツが勝利すべきだという意識は、軍国主義者や過激主義者だけでなく、広汎に見られた。ドイツ一の大家で後にはヒトラーの反対者になるトマス・マンは、ドイツの「支配し、この惑星の統治に参加する権利」に言及していた。「感情移入」の理論を発展させた卓越したドイツの哲学者エーディト・シュタインは、「我々が今や敗北しようとしているなどと」考えるのは「問題外」だと述べている。ヒトラーが政権の座に就くと、シュタインはカルメル会の女子修道院から狩り出され、ユダヤ人として殺された。^{*16}

ヒトラーにとつて、第一次世界大戦の終結はこの惑星が破壊されたことを示すものだった。その結果についてのヒトラーの理解は、同胞ドイツ人のナショナリズムの及ぶところではなかつたし、彼の敗北への反応が失われた領土への一般の怨嗟に似ているのは表面だけのことであつた。ヒトラーにとつて、ドイツの敗北は、この世界のすべての枠組みに歪みが生じていることを示すものだった。なぜなら、ユダヤ人が自然の秩序を支配してしまつたことの証しだったのだから。数千のドイツ・ユダヤ人が戦争の初めにガス殺（フエアガーズング、*Vergasung*。動詞はフエアガーゼン、*vergasein*）をされていたらドイツは勝利を収めていただろう、そうヒトラーは主張した。ヒトラーは、ユダヤ人はお定まりのやり方で彼らの犠牲になつた者たちを飢えに晒したし、第一次世界大戦中（および大戦後）のイギリス海軍によるドイツの海上封鎖は、そのユダヤ人のやり方の応用だと信じ込んだ。それは永続的な病いの一例であつたし、やがてくるさらなる受難の証しだった。ドイツ人が好きな相手を飢えさせるのではなく、ユダヤ人がドイツ人を飢えさせているかぎり、世界は不均衡の中にあるのだつた。^{*17}

一九一八年の敗北から、ヒトラーは将来の戦争について結論を引き出した。ユダヤ人が関わらないかぎりドイツ人はつねに凱歌をあげるだろう。けれど、ユダヤ人がこの惑星すべてを支配しているし、彼らの思想をドイツ人の精神に浸透させていたので、ドイツ国家にとつての闘争は否応なく二種類の形を採らざるをえなかった。いかに壊滅的な勝利をあげても、たんなる征服戦争では決して十分でなかった。劣等人種を飢えさせ、その土地を奪うことに加えて、ドイツ人は同時に、そのグローバルな権力と油断のならない普遍主義とがどんな健全な人種戦争をも台無しにしてしまうユダヤ人を打ち負かす必要があった。ドイツ人は弱者に対する強者の論理を持っていたし、そのうえ強者に対する弱者の論理を持っていた。強者としては、ドイツ人は出遭つた弱者の人種を支配する必要があつた。弱者としては、ドイツ人は、ユダヤ人支配からあらゆる人種を解放しなければならなかつた。かくてヒトラーは、二〇世紀の世界の政治を動かす二つの巨大な力を結合させた。植民地主義と反植民地主義とをである。

ヒトラーは、過激で、絶滅さえ意味する条件下で、土地を求める闘争と、ユダヤ人に対する闘争とを眺めていたが、それでも彼は二つの闘争を異なつたものとして眺めていた。領土を求めて劣等人種と闘争するのは地球の表面の一部をめぐるの問題だつた。ユダヤ人に対する闘争は生態学的であつた。といふのも、それは特定された敵対する人種とか領土に関わるのではなく、地球上の生命の条件に関わるものだつたからだ。ユダヤ人は、「黒死病よりも悪い疫病、精神的な疫病」だつた。ユダヤ人は思想をもって戦うので、彼らの力はどこに行つても見られたし、誰もが自覚のあるなしにかかわらず工作員になりえた。そうした疫病を取り除く唯一の方法は、元から絶たねば駄目だつた。「仮に自然によって、ユダヤ人が国々の崩壊の物質的な原因となるよう意図されているなら」とヒトラーは口にした。「自然によって、それらの国々に健全な反応の可能性が与えられているだろう」。絶滅は完成されねばならな